

桜特集

しだれ桜（江戸彼岸桜）の名所 祥雲寺・八幡山公園を訪ねて



3月下旬花曇りの日、市内のほぼ中心に位置し、近くには昭和小・中央警察署がある祥雲寺を訪問しました。境内に入ると、少し花の盛りは過ぎてはいましたが、樹齢300年以上、高さ7m・太さ5mの堂々たる風格の桜がすぐ目に留まりました。



↑幹の中を見せていただきました



このお寺のご住職である安藤さんのお話によりますと、昭和23年ごろにすぐ近くで火災があり、枝の一部が焼失し、またその頃から樹勢の衰えが始まり、庭師や樹木医たちの懸命の治療により、回復しつつ今日に至っているそうです。

太い樹木の幹の根本は空洞になっており、普段はふたがしてあります。ふたを開けると、中は薄暗いのですが、よく見てみると奥に数本の根が立ち上がっている様子がわかり、この根が命の源であると認識しました。この時、ご住職の「生き物ですから・・・」という言葉が印象的でした。

今から73年前にこの桜の木の種から生まれた子どもが4本見られるという場所に向かう途中の両側の道には、たくさんの羅漢さんや座像の大仏様が見られ、少し下った所は視界が広がり、南西から北西に順序良く植えられた4本のしだれ桜が見事に咲き誇っている風景が見られました。

江戸彼岸桜はほかの桜よりも生長が遅いとのことでした。また、この桜の苗を植栽した年にご住職が誕生したそうです。

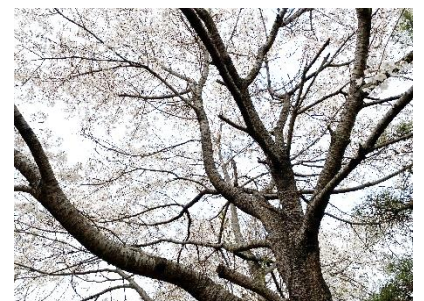


桜から右の方向へ目を移すと広い山林があり、その根元にはたくさんの熊笹が茂っていて、以前からその笹を求めに見えたお寿司屋さんとも現在もお付き合いがあるとのことでした。



元来た道に戻り、今度は南に足をのばし、立派な本堂の前を東南に向かった所に、何番目の札所でしょうか、石仏のすぐそばに石割の桜が咲いており、色はソメイヨシノよりも淡い色、花びらは小ぶりの桜で大島桜とのことでした。小鳥が落としていった種なのではないかと、ご住職のお言葉でした。

あたりを見回すと、ピンク色のヤブ椿や黄色のサンシュモも咲いていました。あまりの広さに境内の面積をお聞きしましたら、16200坪と聞き、その広さには驚くばかりでした。



日頃の喧噪も忘れ、時折鶯の声も聞きながらの桜めぐりでした。お忙しい中、私たちに説明案内をしてくださったご住職にお礼と感謝をお伝えして、隣接している八幡山公園へと向かいました。



八幡山公園の桜

街の中心にあって、宇都宮市民の憩いの場八幡山公園の開園は1927年、広さは東京ドームの約10個分もあるそうです。

桜の種類はソメイヨシノが主流で、山桜・八重桜と800本あります。今年の桜が3月21日開花、4月1日前後に満開となり、年配の人たちは昔を懐かしみながらそぞろ歩き、若い人たちは語りながら桜の下を歩き、花見をしていました。

コロナ禍中でなかったら、若いエネルギーを発散させることができたでしょう。来年も咲きます。桜が終わると紅紫のつつじが700株とそれは見事に咲きます。宇都宮のシンボルとして永久に残して欲しい公園です。

